〔宋代絵画史序説２〕

中国絵画の流れ（原始時代から前漢）

今回は、中国絵画の道程を簡単にふりかえってみたい。

まず、その起源はどこまで遡るであろうか。

ヨーロッパでは今から三万年から一万年前の旧石器時代に、アルタミラなどの洞窟壁画が制作されていますが、中国では現在のところ、そのような優れたこの時代の壁画は発見されていません。

次代の新石器時代の文化のなかで注目すべきは、紀元前五千年から二千年頃まで続いた、彩色された土器を特長とする仰韶文化です。

この黄河中下流域の広い範囲にひろがる仰韶文化期の遺跡から発見される彩陶は、幾何学文様を主としますが、中に人面や鳥や魚などの粗略な図を伴う器を含んでいます。呪術的な意味を持つと考えられるこれらの図は、まだ絵画的遺品と呼ぶべき原始的な段階に留まっています。

ところで、近年、中国各地で岩壁に描かれた原始的な画が発見されて、興味を惹いています。それらは主として人や獣や狩猟の様子などを題材にした彩画や刻画ですが、その制作された年代については諸説があるようです。ここでは、『中国美術全集絵画編１・原始社会至南北朝絵画』（張安治編、中国・人民美術出版社、1986年）の意見に拠って紹介します。

その多くは新石器時代から殷周にかけて作られたと考えられていますが、最古の例では、内蒙古に残る人面の線刻岩画があり、旧石器時代晩期から新石器時代初期すなわち約一万年前まで遡り、新しいものは戦国時代から漢代にかけての制作とされています。

これらの詳しい研究と調査は今後の課題でありましょう。現在までの紹介品を見る限り、原始美術の域を出ず、後の中国絵画に直接つながって行くような様式的特徴は備えていません。

上記のような先史時代の美術はさておき、商（殷）、周以後に話を移しましょう。

後世編まれた『書経』や『史記』は、商代（紀元前約1,500年～1,050年頃）において、既に肖像画の制作が行なわれていたことを記していますが、それを例証する遺品は発見されていません。また、中国では、文字と絵は象形という点で根本的に同質であり、その発生は同じであると考える“書画同源論”が支配的であり、画の発生を文字と同様に遠く遡らせようとする思想が根強くあります。ですからこうした文献の記述を鵜呑みにすることはできませんが、殷墟出土の青銅器や玉器に見られる造形能力から判断すると、この時代に肖像画が既に成立していた可能性も、一概に否定できないと思います。

次に、戦国時代（前453～221年）まで下ると、近年の墳墓発掘調査によって、絵画様式の具体的な考察が可能になります。埋葬者を納めた棺や副葬品の器物の表面を飾る漆画は重要な遺品ですが、とりわけ興味深いのは、楚の中心であった湖南省長沙の二つの楚墓から出た帛画（絹の絵）です。

江蘇省将軍崖岩画　人面植物文

楚墓出土帛画　男子御龍図

馬王堆一号漢墓出土帛画

その一つは龍鳳仕女図と呼ばれる人物図で、縦が30cm余り、横が20cm余りの絹布に墨で、女性と鳳凰と龍を描いています。もう一つは男子御龍図で、仕女図よりやや大きい絹に、龍を御する衣冠の男子を鶴と鯉とともに細い墨線で写し、人物には彩色も加えています。

二枚とも墓主の霊魂が登天昇仙することを願って作られた画で、どちらも人物を側面から見た姿で描くなど、その表現方法は類似していますが、男子図の方が面貌の描出、構図、描線などすべての点で、表現が一段と進んでいます。後世の画と比べても、男子図の顔貌の表現には見るべきものがあり、傘蓋から垂れる紐が竜車の進行に伴って後方へなびいているのもおもしろく、画面全体に生気が感じられます。そして、この図に見られる裾の広がった人物の姿形や、細くて勁いすっきりとした描線は、顧愷之に代表される六朝様式の原型であると言って良いでしょう。

このように紀元後四、五世紀の人物画の様式が、七百年余りも前の紀元前四世紀頃に既に準備されているという事実は、中国絵画の特質である強固な伝統性を物語るものとして見逃してはなりません。また、これらの画は、中国絵画の基本的な画材である絹と墨を用いて描かれた絵画の最も古い作例という点でも重要です。

さて、秦による統一を経て、前漢（紀元前206年～紀元８年）に[illegible]ると絵画遺品も急増し、帛画[illegible]物の装飾画のほかに壁画や塼[illegible]画像塼、板絵などが知られる[illegible]になりますが、いずれも人物を主題としています。

人物画とともに中国絵画の主要なジャンルを形成する花鳥画や山水画が成立するのは六朝以後であり、それ以前は人物や神仙がもっぱら主題とされていたことは、文献の伝えるところでもあります。

この時代の代表例としては、先の戦国時代の帛画と同じく長沙市にある馬王堆漢墓から出土した五幅の帛画が挙げられます。前漢初期の紀元前168年頃に制作されたと推定されるこれらの遺品を戦国時代の帛画に比べると、人体はより的確に把握されており、様々な[illegible]ーズが側面形だけでなく、正面[illegible]斜め正面から描かれていま[illegible]た、画面の奥に向かって列を作[illegible]人物や馬を重ね合わせて配置し、遠近感の表出を意図しています。

また別に、西安付近から出土した、前漢初期の作例とされる銅鏡彩絵車馬人物図のように点景として草木を描き添えて、説話の場面に現実感を与えることに成功したものもあります。

これらの絵画遺品を見て、なによりも重要だと考えられるのは、程度の差はあるものの、画面全体を支配する秩序が共通して感じられることです。この秩序は、直接には整理された構図と抑制された

季刊 美のたより No.86
平成元年２月25日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.